

生涯教育からみた幼児期の教育の重要性

莊 司 雅 子

老人ホームを訪問したある方から聞いた話である。ホームに居住している多くの高齢者の中には、明るく朗らかで仲間とよく協調して楽しい老後生活をしている人がいるものもあれば、またいつも仲間からはなれて、独り淋しく無口で暗い孤独の生活をしている人も多くいるという。それをきいて私も十数年前にコペンハーゲンの「老人の町」を訪れた時のことを思い出した。当時案内してくれた寮母の話によると、健康な老人たちはそれぞれ好みの仕事をもち、しかもときどき老いらくの花も咲くという。一般に老齢期に入れば身体的の各機能が弱るのは自然の理であって如何ともすることができないが、精神機能はよほど老衰していない限り身体ほどの早い老化はないように思われる。いまあげた老人ホームや「老

人の町」にみる高齢者たちの社会性の発達の相違は一般にすでに幼児期の社会性の発達の相違からきていると多く指摘されている。

生涯教育はここ数年来強調されているが、これはシカゴ大学教授のハヴィガーストが二〇年前出した『人間の発達課題と教育』の中で、人間の一生の各々の発達段階にはそれぞれに固有の発達課題をもっているということを叙述している。そしてその課題を解決することが学習であり教育である。しかも人間は幼少年期だけでなく、青年・壮年・老年の各時期にもそれぞれ発達すべき課題をもっているから、一生を通じて学習し、教育を受けなければならない。そういうわけで人間は、学校生活を終えて社会に出ても継続的に勉強し、学習

しなければならぬ。生涯教育とか継続教育とかいわれているのはこのことである。

さて、個人の生涯をめぐるいろいろの時期に発達課題は生ずるものであるが、この課題を立派に成就すれば、個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば不幸になり、社会で認められずその後の課題の達成も困難になってくる。課題のなかにはその時期に一度しかあらわれてこないものと、各々の時期にくりかえしあらわれてくるものがある。たとえば言葉の学習や基本的習慣の形成は幼児期にあらわれる一回的な課題であり、この時期にこれを解決しないと、その後に学習しても成功しない。また読み・書き・数えの基礎学力は児童期に解決すべき課題である。ところが社会性の発達課題は幼児期に始まるが、これは児童期には同性グループに再びあらわれ、青年期には異性間にあらわれ、壮年・中年期には同僚や先輩、後輩にあらわれる。そしてその解決に成功するよう学習しなければならない。老齢期になって社会の第一線から引退した後は、新しく同輩や若輩とうまく交わらねばならないという課題に出合うわけである。そこで、最初に述べたような老人ホームや「老人の町」の人びと

の社会性の発達の相異は、いうまでもなく、前の発達段階における社会性の発達課題に成功している場合と、成功していない場合とに原因している。しかも最も大きい原因は、この社会性の発達、始まりにその課題解決に成功しているかいないかというところにある。というのは社会性の発達課題のようには各々の時期に異なる形でくりかえしあらわれてくる場合は、その初期の課題解決が最も重要である。というのはその始まりの解決に失敗すると、次の時期の課題解決に失敗することになり、その失敗がまた次の失敗になって、結局老年期の失敗に続くことになる。

以上は社会性の発達だけに例をとったが、その他にも、くりかえしあらわれるいくらかの発達課題があるが、それはいづれも幼児期の始まりに成功して、いないとその後に影響するのである。こういう立場から幼児期の教育を考えると、幼児期は一生の各時期の発達課題の解決の始まる時期であるから、保育や教育はすべてこの時期に果たすべき課題を幼児が自ら解決するように助けたり指導したりすることであるといえる。

(聖和女子大学)